
教育総合センター

だより

NO. 153

令和 元. 9. 1



「今そこにある危機」

尼崎市立立花小学校

校長 橋本 悦明

私の趣味の一つに「映画鑑賞」がある。休日ともなると、西宮ガーデンズに映画を見に行くことも多い。この原稿の表題にしている「今そこにある危機」も、25年前の映画のタイトルで、トム・クランシー原作ハリソン・フォード主演でCIA情報アナリストの活躍を描いたものである。ここでその映画の話を書くと、紙幅が尽きてしまうので書かないが、翻って「今私の周りにある危機」について書いてみたい。

今そこにある見えている危機には対応できる。しかし、今そこにあっても見えない危機への対応は難しい。経験値から来る独特の嗅覚が必要である。

教頭時代、ある校長先生が「これは危ない」と言って、私に対処するよう言われたことが何度かあった。私は、「本当かな？」と思いつつ対応し、それらの案件は火を噴くこともなく収まった。初動が遅れると、大きく火を噴いたであろう案件だったと思う。そのような経験を何度も繰り返すうちに、私自身にも危機を察知する嗅覚が備わってきた。

そんな私が今感じていることは、毎日が、地雷原の中を歩いているようだということである。この原稿を書いている7月末現在、尼崎市としても体罰アンケートや管理職人事の問題が大きいのかかかってきている。また、日々の現場に於いても「人、物、金」に関わる様々な危機が、そこかしこに隠れている。人が人を育てる教育という現場に於いては、特に「人」に関わる危

機は次から次へ湧いて出てくる。「子ども」に関わる危機は、まだコントロールしやすいが、「保護者」に関わる危機のコントロールは困難を極める。中でも、「我が子ファースト」の保護者である。

古くからの言い伝えに「獅子の子落とし」がある。現代では虐待だと思われるだろう。確かに、表面的には紙一重である。が、虐待と違うのは、本当に深い愛情を持つ相手にわざと試練を与えて成長させるという点にある。本当に深い愛情を持つ相手にわざと試練を与える辛さ、はい上がってくる（成長）のを待つ苦しさ。なかなか耐えきれものではない。しかしながら、私たちはプロの教師である以上、子どもたちに深い愛情を持って、個々に応じた試練を与え、成長をじっくり待つ。そういう理念を、学校としてもっとアピールし、保護者や地域と共通理解を図っていかないと、ますます地雷を踏んでしまうことに繋がるだろうと強く思う。

以前、大変お世話になった校長先生が「エリートは要らない」と仰ったことがあった。変に上を見るのではなく、地道に子どもを見つめ、寄り添い、歩んでいくような、昔ながらの普通の先生でいい、という意味も含んでいると思う。先生が子どもたちと共に成長していくような、不易の部分を大切にしたい学校を実現し、「今そこにある危機」を乗り越えていきたい。

「短期派遣研修に参加して」



平成30年10月29日～11月2日の1週間、秋田県大仙市立藤木小学校へ研修に参加しました。

藤木小学校は、昨年度143年目を迎えた伝統ある学校です。教職員は16名、児童数は年々減少傾向にあり、全校児童数は69名でした。2・3年生が複式学級で、通常学級5学級に特別支援3学級を加えた計8学級の小規模校です。

学校の敷地は広く、田を所有し、運動場にはスキー山があります。校舎内も、児童のロッカーや靴箱などの個々のスペースが広く、教室扉は全面可動式で、各学年の横にワークスペースという場所がありました。各教室には、棚一面に学級文庫があり、I C教材や教具等も充実していました。

藤木小学校の教育目標は、『夢にむかってたくましく やさしく かしく ～3つの心（あいさつ・命・なかよく）を大切に～』です。

児童は、率先して挨拶をし、伸び伸びと素直です。全校生で取り組む行事が多く、週3回の縦割り掃除など学年を超え日常的に交流をしていました。廊下や階段には、児童の作品や活動写真などがたくさん掲示され、アットホームな雰囲気の学校でした。地域との連携も強く、派遣期間中にも、J Aや警察が協力した行事や授業、また中学校の先生の参観や近隣の小学校との交流がありました。

研究は、教師一人一人が、それぞれ市の教科研究会に入り、専門分野で活躍されています。大仙市内の研究会で示された指導法が広がり、市内の小学校が共通した指導を行っています。

市内では、国語以外の教科は、A4のノートを使用していたこと、筆箱は出さずに鉛筆・消しゴム・赤青鉛筆のみ机の上に置き授

業を受けていたこと、めあては先生からの提示ではなく、全て子どもたちから出させていたこと、ノーチャイムが実施されていたこと、連絡帳ではなく、週案を配布していたことなど特色のある教育内容も知ることができました。

藤木小学校の校内研究テーマは、『主体的に学び、高め合う「藤木っ子」の育成を目指して』です。基本的な学習習慣、振り返り、話し方など全学年系統立てた共通の掲示がありました。学力向上のための取り組みとして、漢字テスト・計算テストをしています。宿題は、全学年毎日家庭学習のみです。テストで80点以上を合格とし、基礎基本の定着を図っています。その他、詩の暗唱検定、スキルタイム（百マス計算や市販のドリルなど）、家庭学習強調週間、ノート展等保護者や全教職員が児童の指導に携わっています。

担任が給食を職員室で食べ、専科等の先生がクラスに入ったり、週3回の空き時間を確保する時間割編成になっていたり、教師自身が時間の余裕があることで、充実した教材研究や日々の情報交換ができ、児童一人一人に対して全教職員が深く関わり、とても手厚い指導を行っていました。

また、教師の服装や整理された校舎内に職場の規律さもありました。今回の研修先は、環境や地域性など大きく異なるところでしたが、児童に対する教師の思いや子どもたちの学ぼうとする意欲は、秋田も尼崎も同じでした。

秋田市でのこれからの教育の課題も聞くことができ、また尼崎市の教育のすばらしさも再確認できたこともあり、大変貴重な学ぶ機会をいただいたことに感謝し、今後の教員生活に活かしていきたいと思います。
(尼崎市立武庫庄小学校教諭 岩崎あやの)

☆☆ 文部科学省派遣で学んだ心の四季 ☆☆

地方教育行政実務研修生として、1年間文部科学省で貴重な経験をさせていただきました。この研修制度は、教育委員会等の地方教育行政に携わる職員を対象に、文部科学省における行政の実務経験を通して、広い識見と高度の実務能力の育成を図ることを目的としたものです。私と同じように全国各地の自治体から50名ほどが様々な部署に配属され、実務を通して学びました。仕事上の経験だけでなく、ともに学んだ人とのつながりができたことも大きな財産となりました。

1年のうち、前期は初等中等教育局の産業教育振興室、後期は総合教育政策局の教育人材政策課で勤めさせていただきました。1年の経験を通して学んだことを鮫島輝明氏の「心の四季」に合わせてお伝えします。

「人に接する時は、温かい春の心」

前期の産業教育振興室で担当した全国産業教育フェアについて、実行委員を務める山口県の高校生が初等中等教育局長のもとに挨拶に訪れた時のことです。5人の高校生が、緊張した面持ちで、局長に自分の名前や役割などを紹介しました。局長は笑顔で全員の話聞き終えた後、それぞれの生徒の役割に応じた質問をされるとともに、優しく労いの言葉をかけられていました。「初対面で1度聞いただけなのに…」とその記憶力に驚くと同時に、一人ひとりを大切にされる姿に人としての温かさを感じました。

「仕事をする時は、燃える夏の心」

後期の教育人材政策課では、「連絡ライン」と呼ばれる仕事を担当させていただきました。「連絡ライン」は、課全体の業務分担を把握し、他局課からの依頼を担当に振り分けたり、課の仕事をまとめて報告したりすることが主な役割になります。課のみなさんには、無理なお願いをすることもたくさんありましたが、

嫌な顔をせず、すぐに対応してくださったので、とても救われました。文部科学省の業務は細分化されていますが、対象となる範囲がとて広く、必要とされる知識が深いため、業務量は非常に多いです。職員のみなさんは、普段から身を削るほどハードな仕事をされていますが、国会となると、さらに緊張感が高まり、官僚の方々を中心に驚くべきスピードで対応なさいます。その判断の速さや的確さ、熱量を間近で感じられたこともいい経験となりました。

「考える時は、澄んだ秋の心」

教育人材政策課の教員免許企画室長とお話させていただいた時のことです。室長に「国の政策や制度を創ることは、大変なプレッシャーではないですか。」と尋ねてみると、「時代の流れをみて、現場の状況に合わせて考えるだけです。」と、簡単なことではないのに、さらっと話してくださいました。普段の何事にも動じない姿からも、冷静沈着に物事を考える大切さを学びました。

「自分に向かう時は、厳しい冬の心」

一人ひとりが担当する業務が大きいので、タフさが必要です。若手職員も例外ではなく、自分の時間を犠牲にして、粉骨砕身頑張ってくださいています。身体を大切にしてほしいなと思いつつ、そのお陰で教育が成り立っていることに感謝しました。私はすぐ易きに流れてしまうので、自分にもっと厳しくあらねばと気を引き締めました。

今、尼崎市教育委員会事務局に新設された学校企画課に帰任させていただいております。尼崎の子供や先生がより輝くことができるよう、文部科学省で学んだことを活かし、自分の役割を果たしていきたいと考えています。

(学校企画課係長 柳 伸彦)

教育総合センターからのお知らせ

☆人事異動のお知らせ

令和元年7月26日付けで尼崎市教育委員会の人事異動がありました。教育総合センター平山直樹所長が学校教育部長に、北垣裕之教育次長が教育次長教育総合センター所長事務取扱となりました。

北垣裕之教育次長（教育総合センター所長）よりのあいさつ

令和元年7月26日付けの辞令により、教育次長との兼務で教育総合センター所長として着任しました北垣でございます。ご存知のように、教育総合センターは研修、調査・研究をするところです。尼崎の教育を支えていただくために、様々な取り組みを提供してまいりますので多くの先生方に足を運んでいただきたいと思いますと考えております。

今後も、教育総合センターを有効利用していただき、研修においては先生方個々の専門性を高め指導力向上を、調査・研究においては各学校の子どもたちの状況把握と今後の指導の方向性の研究をする事等を進めてまいります。

今後の尼崎を背負っていく子どもたちの「生きる力」を育むためにも、みなさまのお力添えをよろしくお願いいたします。

☆教育情報コーナーのご案内

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料、雑誌等を整備しています。教育総合センターでの研修や会議の時など、ぜひお気軽にお立ち寄りください。また、必要な図書、資料等のご相談にも応じております。お気軽にお尋ねください。（3F 教育情報コーナー）

【新着図書】

- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| ・『選択理論でアクティブラーニング』 | 柿谷正期 監修／ほんの森出版 |
| ・『内発的動機づけと自律的動機づけ』 | 速水敏彦 著／金子書房 |
| ・『脳を傷つけない子育て』 | 友田明美 著／河出書房新社 |
| ・『学力がぐんぐん上がる急上昇県のひみつ』 | 千々布敏弥 編／教育開発研究所 |
| ・『教師の勝算』 | ダニエル・T・ウィリングガム 著／東洋館出版社 |
| ・『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』 | 西岡加名恵 著／明治図書 |
| ・『月曜日がつらい先生たちへ』 | 真金薫子 著／時事通信出版局 |
| ・『授業で育てる学級経営』 | 宍戸寛昌 他著／明治図書 |
| ・『あの子はなぜ友だちが出来ないのか』 | 奥田巖文 著／学芸みらい社 |
| ・『学級&授業づくり成功のコツ』 | 大前暁政 著／明治図書 |
| ・『情報社会を支える教師になるための教育の方法と技術』 | 堀田龍也・佐藤和紀 編著／三省堂 |
| ・『いま、ここで輝く。』 | おおたとしまさ 著／エッセンシャル出版 |
| ・『AI時代を生きる子どもたちの資質・能力』 | 赤堀侃司 著／ジャムハウス |

(担当 松浦)

